

バーヴィヴェーカによる 瑜伽行学説批判の思想的背景

宮本浩尊

問題の所在

バーヴィヴェーカ (Bhāviveka) 著『般若灯論』(*Prajñāpradīpa*, 以下、『灯論』と略記) は、ナーガールジュナ (Nāgārjuna) の主著『根本中論偈』(*Mūlamadhyamakakārikā*, 以下、『中論』と略記) に対する註釈書である。

その第25章は、「涅槃の考察 (*Nirvāṇaparīkṣā)」という章題の下に合計24偈の『中論』を擁し、主として涅槃 (nirvāṇa) という概念が無自性 (niḥsvabhāva) であることを論じている。しかし、この章が注目を集める最大の理由は、『中論』第25章第24偈に対する註釈箇所⁽¹⁾の末尾に、瑜伽行学派 (Yogācāra) の学説に対する批判を意図した文章が掲載されていることに由来している。

斎藤 (2005, 169.15-18) は、当該箇所⁽¹⁾に大部の瑜伽行学説批判の文章が掲載されていることに言及して、それが「偈頌に対する純然たる註釈というよりは、むしろ真実 (tattva) や真如 (tathatā) を対象化することなく認識するという智のあり方を重視するバーヴィヴェーカが、あえて当該の句に関連させて三性説および方便唯識説に対する批判を展開するという性格が色濃い」と述べている。

確かに、バーヴィヴェーカ自身が、瑜伽行学派に対する一連の批判の最後に、その議論を付随的な議論 (zhar la bshad pa) であると述べていることから、その批判が『中論』第25章第24偈と関係を持ちながら、ある程度、自由な観点から論じられたものであることが知られる⁽¹⁾。しかし、「なぜ、このような議論が当該箇所⁽¹⁾に掲載されているのか」という問いには考察の余地があるように思われる。そこで、本論文では、この問いに基づいた若干の考察を行うことにし

たい。なお、考察に際しては、アヴァローキタヴラタ (Avalokitavrata) による復註『般若灯論広註』(Prajñābradīpaṭikā, 以下、『広註』と略記) の解釈を重視しながら議論を進めることにする。

1

まず最初に、『灯論』第25章の概観を示し、当該の章における『中論』第25章第24偈の位置づけを確認することから議論を始めよう。

『灯論』では、各章の冒頭部分にその章を著述する目的が示されている。第25章の場合、その著述目的は、「空性と逆の特定の主張を否定することによって、涅槃が無自性であることを示すこと⁽²⁾」であると述べられている。ここで、「空性と逆の特定の主張」とは、「涅槃には自性が有る」と主張する有自性論を意味している⁽³⁾。すなわち、『灯論』第25章は、涅槃に自性が有ると主張する有自性論を批判して、涅槃が無自性であることを論証する章と位置づけることができる。

『灯論』第25章の内容は、三つの部分に大別することができる。『中論』第25章第1偈から第18偈までの註釈箇所では、涅槃という概念が無自性であることを四句否定 (tetralemma) の手法を用いて論証している。

これに続いて、『中論』第25章第19偈から第23偈までの註釈箇所では、涅槃が実在 (bhāva) であると主張する対論者を相手に、修道 (bhāvanā) をめぐる議論がなされる。この箇所に関して、梶山 (1980, 66n23) は、『広註』の解釈に基づけば、『灯論』による『中論』第19偈から第24偈までの註釈を全て瑜伽行学派との対論として位置づけることができると述べているが、この理解は訂正を要する。確かに、『広註』では、『灯論』が『中論』第25章第19偈に対する註釈箇所⁽⁴⁾で想定する対論者を“rnal ’byor spyod pa”であると説明している⁽⁵⁾。しかし、それが瑜伽行学派を指すと言う根拠を『灯論』や『広註』の記述から見いだすことはできない。それ故、この単語は、ひとまず瑜伽師 (yogin) として理解する方が妥当であろう。また、『灯論』や『広註』では、『中論』第25章第19偈以降の註釈箇所、あるいは瑜伽行学派以外の対論者を想定して

議論を展開している。そのため、『中論』第25章第19偈から第24偈までの註釈箇所を全て瑜伽師、あるいは瑜伽行学派との論争として位置づけることはできない。

さて、以上に示した議論を経て、『中論』第25章第24偈に対する註釈箇所では、仏説 (buddhavacana) と仏身 (buddhakāya) の問題が議論されている。『中論』第25章第24偈は、次の通りである。

あらゆる認識が静まり、戲論が静り、吉祥である。ブツダは、どこにおいても、誰に対しても〔如何なる〕教法を〔も〕説示なさらなかつた。⁽⁶⁾

『灯論』では、この偈頌に註釈を加える際にも、涅槃を実在と見なす対論者を想定して議論を進めている。そして、その末尾に、問題となる瑜伽行学説批判の文章が掲載されているのである。⁽⁷⁾

2

では次に、『灯論』第25章における瑜伽行学説批判の文章に話題を移そう。その冒頭部分で、瑜伽行学派は、先に示した『中論』第25章第24偈を踏まえて、次のように述べている。

瑜伽行学派の者達は〔次のように〕述べている。「あらゆる認識が静まり、戲論が静まり、吉祥である。ブツダは、どこにおいても、誰に対しても〔如何なる〕教法を〔も〕説示なさらなかつた」(MMK, XXV, k. 24) と述べたことが真理 (*satya) であるならば、〔中観学派が、〕こ〔の『中論』第25章第24偈で述べられたこと〕を証得するための手だて (*upāya) である依他起 (*paratantra) を損減すること (*apavāda), それは不合理である。⁽⁸⁾

『広註』では、この一文に対して、もう少し詳細な説明がなされている。すなわち、瑜伽行学派は、『中論』第25章第24偈 a 句に「あらゆる認識が静まり (sarvopalambhopaśama)」と述べられている状態を円成実性 (pariṣpannasvabhāva) を証得した状態、あるいは遍計所執された (parikalpita) 認識が停止した状態として理解し、これを証得するための手だてである依他起性 (paratantrasvabhāva) を実在であると主張する。そして、中観学派が依他起性の実在性を認めないの

であれば、それは損減論であると述べている。⁽⁹⁾

これに対して、バーヴィヴェーカは、瑜伽行学派の説く三性説が、いわゆる五事 (pañca-vastu/dharma) 説や三無自性説と結びつくことを説明した上で、⁽¹⁰⁾「彼ら (瑜伽行学派) と共に、このことが考察されなければならない」と述べて、三性説に対する批判を開始する。しかし、この『灯論』の文章だけでは、意味内容が判然としない。そこで、以下に『広註』の解釈を提示しておこう。

実に三種類の自性を説示することに基づいて「あらゆる認識が静まり」と言っているのか。あるいは、もしそうでなければ、縁起 (*pratityasamutpāda) という仕方で二諦 (*dviṣatya) に区別して設定した後に、勝義においては、あらゆる実在が無自性であるから「あらゆる認識が静まり」と言っているのか。こ〔の問題〕を理証 (*yukti) と教証 (*āgama) に基づいて考察しよう、と示しているのである。⁽¹¹⁾

すなわち、『広註』の解釈によれば、バーヴィヴェーカによる瑜伽行学説批判は、『中論』第25章第24偈 a 句に示された「あらゆる認識が静まり」という文句をめぐって、二諦説の立場から、三性説を批判するものであることが解る。

3

以上の考察によって、バーヴィヴェーカによる瑜伽行学説批判の文章が、『中論』第25章第24偈 a 句と関係を持っていることが明らかになった。そこで次に、バーヴィヴェーカが『中論』第25章第24偈、その中でも特に a 句に対してどのような註釈を加えているのかを見ていこう。

バーヴィヴェーカは、『中論』第25章第24偈 a 句「あらゆる認識が静まり」という一文に次のような註釈を加えている。

「あらゆる認識が静まり」とは、認識される対象が無いならば、対境 (*viśaya) が実在しない時に、認識は生じないからである。また、〔対境と認識は、共に〕有為であるが故に、認識対象と同じく、⁽¹²⁾認識は滅するからである。

『広註』では、この一文に対する註釈箇所、瑜伽行学説批判の前哨戦を展

開しているが、そこには、中観学派の基本的立場が表明されている。それは次のように述べられている。

ここで、中観学派の主張の場合、勝義において、認識されるものである対境と、認識する心 (*citta) は、両者とも自性が無いものである。そして、それら (対境と心) も、世俗においては、縁起 (*pratītyasamutpāda) というあり方として有為であるので、他を縁として生じたものであるから、自体 (*ātmaabhāva) から生じたものではないから、認識されるものである対境に自性が無いように、認識する心にも自性が無いので、依他起と円成実のあらゆる認識が減することが「あらゆる認識が静まり」であり、このことは、勝義諦 (*paramārthasatya)、特質が無いこと、特質を離れたもの、不二なるもの、言語表現されないもの、言葉と思惟 (*cintā) を超越したものの、不生であるもの、聖者達によって各人で自証 (*svasaṃvedana) されるべきもの、

生じることなく、減することのない法性は、涅槃と等しいものである。 (MMK, XVIII, k. 7cd)

ということを示したのである。⁽¹³⁾

この一文で注目されるのは、勝義諦を言語表現を離れた自証されるべきものであると定義した上で、『中論』第18章第7偈 cd 句に言及していることであろう。

『広註』は、さらに『中論』第25章第24偈 b 句「戲論が静まり (pra-pañcōpaśama)」に対する『灯論』の解釈を踏まえて『中論』第18章第7偈 ab 句に言及し、同じく b 句に含まれる「吉祥である (śiva)」に対する復註において、⁽¹⁴⁾ 『中論』第18章第5偈に言及している。⁽¹⁵⁾

すなわち、『広註』は、『灯論』による『中論』第25章第24偈 ab 句の註釈部分を、『中論』第18章第5偈、及び第7偈と関連づけて理解しようとしているのである。その際、『広註』は、『中論』第25章第24偈 ab 句を「勝義の特質を示す」ものであると理解している点にも注意が必要である。⁽¹⁶⁾

以上のことから、『広註』は、『中論』第25章第24偈 ab 句を勝義の特質を示

す偈頌として理解し、瑜伽行学説批判に臨むバーヴィヴェーカの思想的立場、あるいは、中観学派の思想的立場を『中論』第18章第5偈と第7偈に基づくものとして理解していたと言えるのである。

4

それでは、『広註』は、瑜伽行学派批判に臨むバーヴィヴェーカの思想的立場をどのようなものとして理解していたのであろうか。次に、この問題を『灯論』、及び『広註』の第18章を資料として考察してみよう。

『灯論』第18章は、「我と法の考察 (*Ātmadharmaparīkṣā)」という章題の下に、合計12偈の『中論』を擁している。その中で、第5偈と第7偈は次の通りである。

業と煩惱が尽きたことによって、解脱が〔ある〕。業と煩惱は、分別に基づいて〔生じる〕。それらは、戯論に基づいて〔生じる〕。戯論は、空性によって滅せられる⁽¹⁷⁾。(MMK, XVIII, k. 5)

言語表現される対象が退けられることによって〔である。なぜならば〕心の対象領域が退けられるからである。生じることなく、滅することのない法性は、涅槃と等しいものである⁽¹⁸⁾。(MMK, XVIII, k. 7)

『灯論』において、両偈の関係は、第7偈が第5偈 cd 句で説かれた「戯論は空であることによって断じられる」という句の意味内容を説明する偈頌として理解されている⁽¹⁹⁾。その際、『広註』は、『灯論』の解釈を四種類の考え方に分けて註釈している⁽²⁰⁾。

その中で、特に重要な解釈は、『広註』による第四番目の解釈である。それは、次に示すバーヴィヴェーカの言葉に対する註釈箇所から始まる。

あるいはまた、空性の智という太陽光線が照らし出した一切法の自性を余すところ無く見て、認識を超越した所に住している〔瑜伽師、彼〕の語りとしての言語表現と意言は退けられるので、言語表現される対象は退けられる⁽²¹⁾。

『広註』は、この一文を『中論』第18章第5偈 cd 句「戯論は空性によって

滅せられる」の意味を説明したものとして理解し、法無我（*dharmanairātmya）を修習した結果である完全なる断と完全なる智を獲得する手だてであると述べている。⁽²²⁾

パーヴィヴェーカは、さらに、言語表現される対象が退けられる理由を「心の活動領域が退けられることによってである」⁽²³⁾と述べている。このことから、パーヴィヴェーカは、先に示した『中論』第18章第7偈b句「心の活動領域が退けられるからである」を同a句「言語表現される対象が退けられることによってである」の根拠として理解していることが解る。

パーヴィヴェーカは、これに続いて、心の活動領域が退けられる仕方を次のように述べている。

この場合、対象の力によって認識が生じるのであり、実在の自性と属性という様々な対象に対して、分別の相続によって様々に分別する時、蚕の如く、自らの影響力（*śakti）をすっかり包摂してしまうことになるのである。

〔一方、〕あらゆる法を無我であると見る人に、そ〔のような分別〕は生じないので、心の対象領域は退けられるのである。⁽²⁴⁾

『広註』は、この一文を註釈するに際して、心を〔対象を〕照らし出す働きであると定義した上で、⁽²⁵⁾心の活動領域が働いている状態を客塵の障碍によって束縛された状態として理解し、法無我を見る者は、その束縛から解放された状態になると説明している。⁽²⁶⁾

そして、『広註』は、次に示すパーヴィヴェーカの言葉を「心の対象領域が退けられる」具体的な方法として理解している。

心の対象領域が退けられることも、真実を認識する主体（*kartṛ）がいるわけではない。では、どのようにして〔心の対象領域が退けられるのか〕と言えば、

生じることなく、滅することのない法性は、涅槃と等しいものである。（MMK, XVIII, k. 7cd）

なぜならば、心と、そ〔の心〕とは別のものである諸法の活動領域が退けられることは、何によっても成されるものではないからである。⁽²⁷⁾

『広註』は、この一文によって「心の活動領域が自証という仕方⁽²⁸⁾で退けられたものであることが示された」と述べている。すなわち、パーヴィヴェーカにとって、「心の対象領域を退ける」仕方は、退ける主体——行為者——を必要としていない。そのような態度は、『広註』の言葉を借りれば「自証すること」に他ならないものであり、さらに、先に示したように、『中論』第25章第24偈 a 句に対する註釈箇所⁽²⁸⁾で、「あらゆる認識が静まり」という状態を自証されるべきものとして位置付けたことと関係性を有するものであると言える。

『広註』は、以上に示した一連の議論を受けて、次のように述べている。

以上のように、他の外道達によって我と我所として施設されたもの、あるいは、他の部派(*nikāya)の者達によって所取と能取として施設されたもの、あるいは、識のみであると主張する者達によって、心と心によって施設されたものの如くでは無く、この大乘中観の仕方においては、世俗の言説として外と内の縁起であり、考察しない場合にのみ好ましいもの(*avicāraikaramanīya)であり、幻程度のものとして働く効果を生み出す能力として存在し、それに執着することで三有(*bhavatraya)を輪廻し、雑染の相続も継続するが、それに執着せずに、勝義において無自性であると知ることによって、生存の種子を断じて、無住处涅槃という大いなる楽もまた獲得しないという仕方⁽²⁸⁾で獲得することになる。このことは、ナーガールジュナ大先生、アールヤデーヴァ(*Āryadeva)先生、パーヴィヴェーカ先生、そしてブッダパーリタ(*Buddhapālita)先生などの大乘中観の道を主張する方々が、般若波羅蜜(*prajñāpāramitā)の仕方⁽²⁸⁾を説示したものである。

すなわち、『広註』によれば、パーヴィヴェーカによる心の対象領域が停止する仕方は、ナーガールジュナ以来の中観学派の方法論として位置づけられるものである。

以上に示した議論の結論として、パーヴィヴェーカは、次のように述べる。

それ故に、以上のように一切法を平等であり、涅槃と等しいものであり、不生であると見ることによって、心の活動領域は退けられることになる。

そして、心の活動領域が退けられたことによって、言語表現される対象は退けられる。そして、こ〔の言語表現される対象〕が退けられたことによって、言説諦に執着することを特質とする戯論は静まるのである⁽³⁰⁾。

この一文からは、バーヴィヴェーカが『中論』第18章第5偈 cd 句で述べられた「戯論は空性によって滅せられる」ということが、第7偈 b 句「心の対象領域が退けられる」ことによって実現されると考えていたことが解る。そして、この戯論は、「言説諦に執着すること」をその特質としている。そのため、心の対象領域が退けられることによって戯論が静まった状態とは、言説諦に対する執着が静まり、勝義諦が明らかになる状態であると言い換えることも可能である。すなわち、このことは、『中論』第25章第24偈 ab 句に述べられた勝義諦の特質が実現することであると言えるのである。

さて、以上でバーヴィヴェーカによる『中論』第25章第7偈に対する第四番目の解釈が終了したのであるが、『広註』は、これに続けて、さらに踏み込んだ議論を展開する。

『広註』は、『中論』第18章第4偈⁽³¹⁾を声聞 (*śrāvaka)・独覚 (*pratyekabuddha) と共通した人無我 (*pudgalanairātmya) を実現する仕方を説明した偈頌であると理解している⁽³²⁾。『広註』によれば、この人無我は、煩惱障 (*kleśāvaraṇa) を断じることによって実現される。

一方、『広註』は、『中論』第18章第5偈を大乘仏教に固有の法無我が実現した状態を説明した偈頌として理解⁽³³⁾し、同第7偈を法無我を実現するための方法を説明した偈頌として理解している⁽³⁴⁾。『広註』によれば、法無我は、所知障 (*jñeyāvaraṇa) を断じることによって実現すると述べている。

すなわち、『広註』の解釈に基づけば、『中論』第7偈は、同第5偈で述べられた法無我の状態を実現するために、所知障を断じる手段を述べた偈頌として位置付けることができる。そして、この第7偈 b 句で説かれた「心の活動領域が退けられること」こそが、所知障を断じる具体的な方策であると言えることができる。

これまでの考察で明らかになったように、『広註』は、この『中論』第18章

第7偈b句を『灯論』第25章における瑜伽行学説批判に際してのバーヴィヴェーカの基本的立場として理解していた。これらの事柄を合わせて考えてみると、『広註』は、バーヴィヴェーカと瑜伽行学派の論争を所知障を断じるための方法をめぐる論争として理解していた、とすることができるのではないだろうか。

結 論

最後に、これまでの議論をまとめて結論とする。

『広註』の解釈に基づけば、バーヴィヴェーカは、瑜伽行学派との論争に臨むにあたって、『中論』第18章第5偈と第7偈を自らの基本的な立場としていた。その際、第5偈は、法無我が実現した状態を示した偈頌として理解され、第7偈は、所知障を断じることによって、法無我を実現するための具体的な方法を示す偈頌として理解されていた。

次に、『中論』第18章第5偈と第7偈は、共に第25章第24偈ab句と密接に関係するものであった。『広註』は、第25章第24偈ab句を勝義の特質を示す句であると理解していたが、第18章の考察を踏まえれば、それは、所知障を断じて法無我を実現した状態を示す句と言い換えることができるだろう。すなわち、『広註』は、バーヴィヴェーカが、法無我を実現するための具体的な方法である所知障を断じる仕方をめぐって、瑜伽行学派との対論を展開していると考えていたとすることができるのである。

略号および参考文献

D: *Tibetan Tripiṭaka* sDe dge edition.

MMK: *Mūlamadhyamakakārikā* of Nāgārjuna.

P: *Tibetan Tripiṭaka* Peking edition.

PP: *Prajñāpradīpa* of Bhāviveka.

PPT: *Prajñāpradīpaṭīkā* of Avalokitavrata.

de Jong (1977): Jan W. de Jong *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, The Adyar Library And Research Centre.

斉藤 (2005): 斉藤明「『中観心論』の書名と成立をめぐる諸問題」『印度学仏教学研究』53-2, 167-173.

梶山 (1980): 梶山雄一「『知恵のともしび』第二十五章 (前段の試訳)」『密教学』第

注記

- (1) Cf. PP(D) tsha 248a8; PPṬ(D) za 303b3.
- (2) PP(D) tsha 234b2; PPṬ(D) za 248b5-6: stong pa nyid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par dgag pas mya ngan las 'das pa ngo bo nyid med pa nyid du bstan pa.
- (3) PP(D) tsha 234b3-5; PPṬ(D) za 249b1, *do*. 249b3-5: 'dir smras pa / khyod 'dod pa ltar / gal te 'di dag kun stong na // 'byung ba med cing 'jig pa med // (MMK, XXV, k. 1ab) ngo bo nyid med pa'i phyir / dper na mo gsham gyi bu bzhin no zhes bya bar bsams so // de dag med pa'i phyir nyon mongs pa rnams la yang 'byung ba dang 'jig pa med la / de dag dang ldan pa'i ming dang gzugs la yang 'byung ba dang 'jig pa med pas / gang zhiig spangs dang 'gags pa las // mya ngan 'da' bar 'gyur bar 'dod // (MMK, XXV, k. 1cd) phung po lhag ma dang bcas pa dang / phung po lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings kyi dbang gis so // (ここで [対論者は, 次のように] 述べている。君 (中観学派) が認めるように, もし, これら (諸實在) が全て空であるならば, [主張] 生じることは無く, 滅することも無い。(MMK, XXV, k. 1ab) [証因] 自性が無いからである。[喩例] 例えば, 石女の息子の如し, と考えられる。[そのように考えるならば,] それら (諸實在) が無いから, 諸々の煩惱 (*kleśa) も生じることと滅することが無く, それら (諸々の煩惱) を保持した名称と形態 (*nāmarūpa) も, 生じることと滅することが無いので, [その場合に,] 何を断じ, 何が滅した後に, 涅槃になると認めるのか。(MMK, XXV, k. 1cd) 有余依 (*sopadiśeṣa) と無余依 (*nirupadiśeṣa) という涅槃の領域 (*dhātu) に関してである)。
- (4) PP(D) tsha 238a4-5; PPṬ(D) za 260a2-3: 'dir smras pa / don dam par mya ngan las 'das pa ni yod pa kho na yin te / skye ba dang rga shis 'jigs pa rnams de thob par bya ba'i phyir 'jug pa yod pa'i phyir ro // med pa la ni khyad par can rnams de thob par bya ba'i phyir 'jug pa ma mthong ste / dper na rus sbal gyi spu bzhin no // mya ngan las 'das pa la ni de 'thob par bya ba'i phyir dang / khyad par can rnams lam bsgom pa la 'jug pa yod pas de'i phyir / don dam par mya ngan las 'das pa ni yod pa kho na yin no // (ここで [対論者は, 次のように] 言う。[主張] 勝義において, 涅槃はまさしく実在するものである。[証因] 生 (*jāti) と老死を畏れる者達は, そ [の涅槃] を獲得するために, [修道に] 向かって活動をおこすことが有るからである。[異類例] 実在しないものに向かつて, 優れた人々が, そ [の实在しないもの] を獲得するために [修道に] 向かって活動をおこすことは見られない。例えば, 亀 (*kūrma) の毛の如し。[連合] 涅槃に向かつて, それを獲得するために, 優れた人々が修道に向かつて活動をおこすことが有る。[結論] それ故に, 勝義において涅槃はまさしく実在するものである)。

- (5) PPT(D) za 260a4-7: pha rol po dag rnal 'byor pa rnams mya ngan las 'das pa thob par bya ba'i phyir lam bsgom pa la 'jug cing 'khor ba ni spong / mya ngan las 'das pa la ni len pas 'khor ba dang mya ngan las 'das pa khyad par yod pa'i gtan tshigs kyis don dam par mya ngan las 'das pa yod pa kho na yin te zhes zer ba'i tshig yin te / de dag ni chos can dang / bsgrub par bya ba chos dang / sgrub pa'i chos dang / mi mthun pa'i phyogs kyi dpe dang / nye bar sbyar ba'i sbyor ba dang / mjug bsdu ba yin par go rim bzhin du sbyar te / 'di na rus sbal gyi spu lta bu med pa gang la khyad par can rnams de thob par bya ba'i phyir 'jug pa med pa de ni yod pa ma yin gyi / mya ngan las 'das pa la ni rnal 'byor pa khyad par can rnams ni de thob par bya ba'i phyir lam bsgom pa la 'jug pa yod pa'i phyir don dam par mya [PPT(P) za 309b] ngan las 'das pa ni yod pa kho na yin no zhes zer ro // (瑜伽師 (*yogin) である対論者達が、涅槃を獲得するために、修道に向かって活動をおこし、輪廻を断じて、涅槃を手に入れるので、「輪廻と涅槃の区別 (*viśeṣa) は有る」という証因に基づいて、「勝義において、涅槃はまさしく実在する」と述べた語句である。これらは、主辞、所立法、能立法、異類例、連合、結論であるものと順番通りに結び付けられる。すなわち、ここで、亀の毛のような実在しないもの——それに向かって、優れた人々が、それを獲得するために〔修道に〕 に向かって活動をおこすことが無いもの——それが実在することは無いけれども、涅槃に向かって優れた人々である瑜伽師が、そ〔の涅槃〕を獲得するために修道に向かって活動をおこすことが有るので、勝義において、涅槃はまさしく実在するものである、と言うのである)。
- (6) PP(D) tsha 239b3 etc; PPT(D) za 263a2-3 etc: dmigs pa thams cad nyer zhi zhing // spros pa nye bar zhi ba ste // sangs rgyas kyis ni gang du yang // su la'ang chos 'ga' ma bstan to // Cf. de Jong (1977, 40): sarvopalambhopaśamaḥ prapañcōpaśamaḥ śivaḥ / na kva cit kasya cid dharmo buddhena deśitaḥ //.
- (7) 『灯論』において、瑜伽行学派は、涅槃を実在と見なす学派のひとつとして数えられている。Cf. PPT(D) za 253a1: rdzas su yod par smra ba ni dngos po yin par smra ba ste grangs can dang / bye brag pa dang / bye brag tu smra ba dang / rnal 'byor spyod pa la sogs pa dag go // ([涅槃が] 実体 (*dravya) として有ると語る者とは、〔涅槃が〕 実在であると語る者のことであり、サーンキヤ (*Sāṃkhya) 学派、ヴァイシェーシカ (*Vaiśeṣika) 学派、毘婆沙師 (*Vaiḥbhāṣika)、瑜伽行学派 (*Yogācāra) などの者達である)。
- (8) PP(D) tsha 242a1-2; PPT(D) za 271a4-5: rnal 'byor spyod pa pa dag gis smras pa / dmigs pa thams cad nyer zhi zhing // spros pa nyer zhi zhi ba ste // sangs rgyas kyis ni gang du yang // su la'ang chos 'ga' ma bstan to // (MMK, XXV, k. 24) zhes bya ba ni bden na de rtogs par bya ba'i thabs gzhan gyi dbang la skur pa 'debs pa de ni mi rung ste /.
- (9) PPT(D) za 271a5-b1: 'dir rnal 'byor spyod pa pa dag na re lung las "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba (MMK, XXV, k. 24a)" zhes bya ba la sogs pa'i tshigs su

bcad pa bka' stsal pa de ni bden na / khyed dbu ma pas de rtogs par bya ba'i thabs gzhan gyi dbang gi mtshan nyid la skur pa btab pa de ni mi rung ste / 'di ltar "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" zhes bya ba ni yongs su grub pa'i ngo bo nyid rtogs na byis pa rnam kyis kun brtags pa'i "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" yin te / "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" de rtogs par bya ba'i thabs ni gang la gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid yod pa de la de kun brtags pa'i ngo bo nyid dang bral zhing rnam par dag pa na yongs su grub pa'i ngo bo nyid du gyur pa ni "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" yin pa / gang la gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid med pa de la gang zhig dag pas yongs [PPT(D) za 271b] su grub par 'gyur te / de bas na "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" de rtogs par bya ba'i thabs gzhan gyi dbang la skur pa 'debs pa de ni mi rung ngo zhes zer ba'i tshig yin no // (ここで、瑜伽行学派の者達が、次のように、聖典(『中論』)において「あらゆる認識が静まり」云々という偈頌でお説きになられたことが真実であるならば、中観学派である君が、こ〔の『中論』第25章第24偈で述べられたこと〕を証得するための手だてである依他起の特質を損滅すること、それは不合理である。なぜならば、「あらゆる認識が静まり」とは、円成実性を証得すれば、愚者(*bāla)達によって遍計所執されたあらゆる認識が静まることである。すなわち、この「あらゆる認識が静まり」を証得するための手だてである依他起性が実在する時に、こ〔の依他起性〕が遍計所執性から離れて清浄(*praśuddha)になった時に円成実性になるということが、「あらゆる認識が静まり」ということである。依他起性が実在しない時に、何が清浄になることによって、円成実になるのか。従って、この「あらゆる認識が静まり」を証得するための手だてである依他起性を損滅することは不合理である、と述べた語句である)。

- (10) PP(D) tsha 242a4; PPT(D) za 272b2: de dag dang lhan cig tu 'di dpyad par bya ste /.
- (11) PPT(D) za 272b2-4: ji ngo bo nyid gsum po dag bstan pa kho nas dmigs pa thams cad nye bar zhi ba zhes bya bar 'gyur ram / 'on te rten cing 'brel par 'byung ba'i tshul gyis bden pa gnyis rnam par bzhag pas don dam par dngos po thams cad ngo bo nyid med pa nyid kyis dmigs pa thams cad nye bar zhi ba zhes bya bar 'gyur ba 'di rigs pa dang lung dag gis dpyad par bya'o zhes ston to //.
- (12) PP(D) tsha 239b3-4; PPT(D) za 263a4-5: "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" (MMK, XXV, k. 24a) ni dmigs par bya ba'i don med na yul med pa la dmigs pa med pa'i phyir dang / 'dus byas yin pa'i phyir dmigs par bya ba bzhin du dmigs pa log pa'i phyir ro //.
- (13) PPT(D) za 263b1-4: 'dir dbu ma pa dag gi phyogs la don dam par dmigs par bya ba'i yul dang / dmigs par byed pa'i sems gnyis ka yang ngo bo nyid med pa yin la / de dag kyang kun rdzob tu rten cing 'brel par 'byung ba'i tshul gyis 'dus byas yin pa'i phyir rkyen gzhan las 'byung bas rang gi ngo bo nyid las skye ba med pa'i phyir ji ltar dmigs par bya ba'i yul ngo bo nyid med pa bzhin du dmigs

par byed pa'i sems kyang ngo bo nyid med pas gzhan gyi dbang dang yongs su grub pa'i dmigs pa thams cad log par gyur pa ni "dmigs pa thams cad nye bar zhi ba" (MMK, XXV, k. 24a) yin te / de ni don dam pa'i bden pa mtshan nyid med pa'i mtshan nyid dang bral ba gnyis su med par brjod du med pa smra ba dang / bsam pa las 'das pa skye ba med pas 'phags pa rnam kyis so so rang gi rig pa // ma skyes pa dang ma 'gags pa // chos nyid mya ngan 'das dang mtshungs // (MMK, XVIII, k. 7cd) zhes bya ba yin par bstan to //.

- (14) PPT(D) za 263b4-6: dmigs pa thams cad nye bar zhi ba kho na'i phyir bsam gyis mi khyab pa'i dbyings de la yid la brjod pa dang / tshig tu brjod pa'i mtshan nyid kyi spros pa mi 'jug pa'i phyir "spros pa nye bar zhi ba" yin ste / de ni brjod par bya ba dang sems kyi spyod yul log pa'i don dam pa / brjod par bya ba log pas te // sems kyi spyod [PPT(P) za 313b] yul log pas so // (MMK, XVIII, k. 7ab) zhes bya ba yin par bstan to // (あらゆる認識がまさしく静まるから、思惟の及ばないこの領域において、意言 (*manojalpa) と、語句としての言語表現 (*vāgvyāhāra) という特質を持つ戯論は働かないので、「戯論が静まり」である。そして、この言語表現されるものと、心の対象領域 (*cittagocara) が滅した勝義が、言語表現される対象が退けられることによって [である。なぜならば] 心の対象領域が退けられるからである。(MMK, XVIII, k. 7ab) ということを示したのである)。
- (15) PPT(D) za 263b6-7: "las dang nyon mongs pa'i gnod pa ni rnam par rtog pa las 'byung la / rnam par rtog pa ni spros pa las 'byung / spros pa ni stong pa nyid kyis 'gags pas" (MMK, XVIII, k. 5) / gang gi tshie brjod par bya ba dang / sems kyi spyod yul log pas ma skyes pa dang / ma 'gags pa'i chos nyid mya ngan las 'das pa dang mtshungs pa rtogs pa'i dus na gnod pa thams cad dang bral bar gyur pa ni zhi ba ste / de nyid don dam pa'i mtshan nyid yin par bstan to // (「業 (*karman) と煩惱 (*kleśa) が尽きたことによって、解脱が [ある]。業と煩惱は、分別 (*vikalpa) に基づいて [生じる]。それらは、戯論に基づいて [生じる]。戯論は、空性によって滅せられる (MMK, XVIII, k. 5)」) ので、言語表現されるものと、心の対象領域が退けられることで、不生不滅の法性が涅槃と等しいものであると理解した時に、あらゆる障碍から解放されることが「吉祥」であり、これが勝義の特質であることを示したのである)。
- (16) PPT(D) za 263a3-4: tshig le'ur byas pa'i phyed gong mas ni don dam pa'i mtshan nyid bstan la / phyed 'og mas ni don dam par sangs rgyas kyis gnas skabs gang du yang gang zag su la yang chos 'ga' yang ma bstan pas pha rol po dag gi gtan tshigs kyi don ma grub pa nyid du bstan to // (偈頌に含まれた前の半分 (MMK, XXV, k. 24ab) は、勝義の特質を示し、[偈頌に含まれた] 後ろの半分 (MMK, XXV, k. 24cd) は、勝義において、ブツダは如何なる時においても、誰に対しても、如何なる教法をも説示されなかったので、対論者達の証因の内容は成立しないもの (*asiddha) であることを示している)。
- (17) las dang nyon mongs zad pas thar // las dang nyon mongs rnam rtog las // de

dag spros las spros pa ni // stong pa nyid kyis 'gag par 'gyur // Cf. de Jong (1977, 24): karmakleśakṣayān mokṣaḥ karmakleśā vikalpataḥ / te prapañcat prapañcas tu śūnyatāyāṃ nirudhyate //.

- (18) brjod par bya ba ldog pas te // sems kyi spyod yul ldog pas so // ma skyes pa dang ma 'gags pa // chos nyid mya ngan 'das dang mtshungs // Cf. de Jong (1977, 25): nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocaraḥ / anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā //.
- (19) PP(D) tsha 187a2; PPṬ(D) za 80b3-4: spros pa ni stong pa nyid kyis 'gag par 'gyur ro zhes gang smras pa de ji ltar stong pa nyid kyis 'gag par 'gyur ba de ltar 'di bshad par bya ste (戯論は空性によって滅せられる (MMK, XVIII, k. 5cd) と述べたことが、どのようにして空性によって滅せられるのか、それを説明しなければならぬ)。
- (20) 本論文では、紙面の都合上、四種類の考え方を全て紹介することはできない。その概要は、丹治 (1988, 213.9-225.9) に示されているので、そちらを参照して頂きたい。
- (21) PP(D) tsha 188a1-2; PPṬ(D) za 83a7-b1: yang na stong pa nyid shes pa'i nyi ma'i 'od zer [PPṬ(D) za 83b] snang bar byas pa'i dngos po thams cad ngo bo nyid la kun tu lta zhing / dmigs su med pa la rab tu gnas pa'i ngag dang yid kyi brjod pa ldog pa'i phyir / brjod par bya ba ldog pa ste /
- (22) PPṬ(D) za 83b1-4: “spros pa ni stong pa nyid kyis 'gag par 'gyur ro” (MMK, XVIII, k. 5cd) zhes bya ba de'i don ston cing / tshig le'ur byas pa snga ma de nyid kyi don rnam par bshad pa gzhan ston te / yang na rnal 'byor pa gang stong pa nyid shes pa'i nyi ma'i 'od zer gyis snang bar byas pa'i dngos po thams cad kyi ngo bo nyid la kun tu lta zhing dmigs su med pa la rab tu gnas pa'i rnal 'byor pa de'i ngag dang yid kyi brjod pa ldog pa'i phyir brjod par bya ba ldog la / de'i ngag dang yid kyi brjod par bya ba log pas tha snyad kyi bden pa la mngon par zhen pa'i mtshan nyid kyi spros pa nye bar zhi bar 'gyur ba ni stong pa nyid kyis spros pa 'gag pa yin te / de nyid theg pa chen po la chos bdag med pa nyid bsgoms pa'i 'bras bu spangs pa phun sum tshogs pa dang ye shes phun sum tshogs pa thob pa'i thabs yin no zhes bya bar ston to // ([この『灯論』の文章は、] 「戯論は空性のよって滅せられる」と述べたことの意味を示している)のであり、以前の偈頌 (MMK, k. 7) の意味に対する別の説明を示している。すなわち、あるいはまた、空性の智という太陽光線によって照らし出された一切法の自性を余すところ無く見て、認識を超越した所に住している瑜伽師、その瑜伽師の語句としての言語表現と意言は退けられるので、言語表現されるものは退けられる。そして、この語句としての言語表現と意言の対象が減ることによって、言説に執着することを特質とする戯論が静まることこそが、戯論が減することであり、これこそが大乘において法無我を修習した結果である完全なる断と完全なる智を獲得するための手だてである、ということを示している)のである)。

- (23) PP(D) tsha 188a2; PPṬ(D) za 83b4: sems kyi spyod yul ldog pas so //.
- (24) PP(D) tsha 188a2-3; PPṬ(D) za 83b5-7: 'di la yul gyi stobs kyis rnam par shes pa skyes shing dngos po'i ngo bo nyid dang khyad par gyi yul tha dad pa la rtog pa'i rgyun dag gis rnam pa tha dad pa du mar rtog pa na dar gyi srin bu bzhin du bdag gi mthu nyid kun nas dkris par 'gyur ro // chos thams cad bdag med par mthong bas ni de mi 'jug pa'i phyir sems kyi spyod yul ldog go //.
- (25) PPṬ(D) za 83b5: sems kyi ngo bo nyid rang bzhin gyis 'od gsal ba nyid do // de ldog pa ni glo bur gyi sgrib pa las rnam par grol zhing gnas 'gyur ba nyid do // (心の本性は、自性として〔対象を〕照らし出す働きである。こ〔の対象を照らし出す働き〕が退けられることは、客塵 (*āgantuka) の障蔽から解放され、状態 (*avasthā) が変わることである)。
- (26) PPṬ(D) za 83b7: des ni glo bur gyi sgrib pas 'ching ba dang / chos bdag med par mthong bas rnam par grol zhing gnas 'gyur ba'i tshul bstan to // (これによって、客塵の障蔽によって束縛された〔有様〕と、法無我を見ることによって解放され、状態が変わる有様が示されたのである)。
- (27) PP(D) tsha 188a3-4; PPṬ(D) za 83b7-84a1: sems kyi spyod yul log pa yang de kho na shes pa'i byed pa po dang ldan [PPṬ(D) za 84a] pa ma yin te / 'o na ji lta bu zhe na / ma skyes pa dang ma 'gags pa // chos nyid mya ngan 'das dang mtshungs // gang gi phyir sems dang de las gzhan pa'i chos rnam kyi spyod yul ldog pa de ni gang gis kyang bya ba ma yin pa'i phyir te /.
- (28) PPṬ(D) za 84a1-2: sems kyi spyod yul rang rig pa'i tshul gyis ldog pa nyid du bstan to //.
- (29) PPṬ(D) za 84a6-b2: ji ltar gzhan mu stegs can dag gis bdag dang bdag gir btags pa dang sde pa gzhan dag gis gzung ba dang 'dzin pa'i dngos por btags pa dang / rnam par shes pa tsam du smra ba dag gis / sems dang sems kyis rnam par btags pa lta bu ma yin gyi / theg pa chen po'i dbu ma pa'i tshul 'di la kun rdzob kyi tha snyad du ni phyi dang nang gi rten cing rten cing 'brel par 'byung ba ma brtags gcig pu na nyams dga' ba sgyu ma tsam du bya ba byed nus par yod [PPṬ(D) za 84b] cing de la mngon par zhen pas ni srid pa gsum du 'khor zhing kun nas nyon mongs pa'i rgyun kyang 'brel par 'gyur la / de la mngon par ma zhen cing don dam par ngo bo nyid med par shes pas ni srid pa'i sa bon 'gag cing mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa'i bde ba chen po yang thob pa med pa'i tshul gyis 'thob par 'gyur te / de ni / slob dpon klu sgrub kyi zhal snga nas dang / 'phags pa lha dang / legs ldan 'byed dang / bud dha p'a li ta la sogs pa theg pa chen po dbu ma pa'i lam smra ba rnam kyis shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul bstan pa yin no //.
- (30) PP(D) tsha 188a7-b1; PPṬ(D) 84b2-3: de'i phyir de ltar chos thams cad kyi mnyam pa nyid mya ngan las 'das pa dang mtshungs pa skye ba med par mthong bas ni sems kyi spyod yul ldog par 'gyur la / sems kyi spyod yul log pas ni brjod

par bya ba ldog cing / de log pas ni tha snyad [PP(D) tsha 188b] kyi bden pa la mngon par zhen pa'i mtshan nyid kyi spros pa nye bar zhi bar 'gyur ro //.

- (31) Cf. de Jong (1977, 24): mamety aham iti kṣiṇe bahirdhādhyātmam eva ca / nirudhyata upādānaṃ tatksayāḥ janmanaḥ kṣayaḥ //.
- (32) PPT(D) za 84b5-7: las dang nyon mongs pa zad pas ni thar par 'gyur te / las dang nyon mongs pa zad pas thar pa thob pa de yang sngar / nang dang phyi rol nyid dag la // bdag dang bdag gi zad gyur na // nye bar len pa 'gag 'gyur zhing // de zad pas na skye ba zad // (MMK, XVIII, k. 4) ces smos pas bstan pa yin te / de ni nyan thos dang rang sangs rgyas dang thun mong ba'i rnam par grol ba gang zag bdag med pa nyid rtogs pas rab tu phye ba nyon mongs pa'i sgrub pa spong ba'i thabs yin te / sgo de nas ni nyan thos dang rang sangs rgyas kyi lam 'bras bu dang bcas pa thams cad yongs su rdzogs shing / dge sbyong gi 'bras bu mthar thug pas rab tu bye ba'i mi slob pa tshogs dang spyod pa dang bse ru lta bu'i go 'phang nyid thob par 'gyur ro // (業と煩惱が尽きることによって解脱することになる。業と煩惱が尽きることによって解脱を獲得すること、以前に、「内と外の対象に対して、私、私のものという思いが尽きた時、執着は断じられる。それが尽きることによって生起は尽きる」(MMK, XVIII, k. 4) と述べることによって示されたのである。これは、声聞や独覚と共通した解脱であり、人無我を理解することとして特徴付けられた煩惱障 (*kleśāvaraṇa) を断じる手だてである。そして、これを通して、声聞と独覚の道とその結果というあらゆるものが完全に成就し、沙門果が成就することとして特徴付けられた無学 (*asaikṣa) という資糧を獲得すること、あるいはサイの角の如き境地を獲得することになる)。
- (33) PPT(D) za 84b4-5: sngar / las dang nyon mongs zad pas thar // las dang nyon mongs rnam rtog las // de dag spros las spros pa ni // stong pa nyid kiyis 'gag par 'gyur // (MMK, XVIII, k. 5) zhes smos pas rnam par grol ba thun mong ma yin pa bstan te / de la 'jig rten pa'i spros pa las ni rnam par rtog pa 'byung la / rnam par rtog pa las ni las dang nyon mongs pa 'byung zhing / las dang nyon mongs pa zad pas ni thar par 'gyur te / (以前に、「業と煩惱が尽きることによって、解脱が〔ある〕。業と煩惱は、分別に基づいて〔生じる〕。それらは、戯論に基づいて〔生じる〕。戯論は、空性によって滅せられる」と述べることによって、〔声聞・独覚と〕共通しない (*asādhāraṇa) 解脱が示されたのである。こ〔の偈〕において、世間の戯論から分別が生じ、分別から業と煩惱が生じる。そして、業と煩惱が尽きることで解脱する)。
- (34) PPT(D) za 84b7-85a4: "spros pa ni stong pa nyid kiyis 'gag par 'gyur ro" (MMK, XVIII, k. 5cd) [PPT(D) za 85a] zhes gang smras pa de la ji ltar stong pa nyid kiyis 'gag par 'gyur zhe na / sngar "brjod par bya ba ldog pa sems kyi spyod yul ldog pas so // ma skyes pa dang ma 'gags pa // chos nyid mya ngan 'das dang mtshungs // (MMK, XVIII, k. 7) zhes smos pa'i rim gyis "chos thams cad kyi mnyam pa nyid mya ngan las 'das pa dang mtshungs pa skye ba med par mthong

bas ni sems kyi spyod yul ldog par 'gyur la / sems kyi spyod yul log pas ni brjod par bya ba ldog cing / de log pas ni tha snyad kyi bden pa la mngon par zhen pa'i mtshan nyid kyi spros pa nye bar zhi bar 'gyur te (PP(D) tsha 188a7-b1 cf. n30)" / de ni nyan thos dang rang sangs rgyas dang / thun mong ma yin pa'i rnam par grol ba chos bdag med pa nyid du rtogs pas rab tu phyed ba shes bya'i sgrig pa spong ba'i thabs yin te / sgo de nas ni theg pa chen po'i lam 'bras bu dang bcas pa thams cad yongs su rdzogs shing / bla na med pa'i sangs rgyas bcom ldan 'das kyi go 'phang nyid thob par 'gyur ro // (「戲論は空性によって滅せられる」と述べられたが、その場合、どうして空性によって滅せられるのかと言えば、以前に、「言語表現される対象が退けられることによって〔である。なぜならば〕心の対象領域が退けられるからである。生じることなく、滅することのない法性は、涅槃と等しいものである」と述べた道理によって、「一切法が平等であり、涅槃と等しいものであり、不生であると見ることによって、心の活動領域は退けられることになる。そして、心の活動領域は錯誤したものであるから、言語表現される対象は退けられる。そして、それが錯誤したものであるから、言説諦に執着することを特質とする戲論は静まるのである」。これは、声聞や独覚と共通しない解脱であり、法無我を理解することとして特徴付けられた所知障を断じる手だてである。これを通して、大乘の道とその結果というあらゆるものが完全に成就し、無上なる仏世尊の境涯を獲得するのである)。

本稿は平成21年度科学研究費補助金（若手（スタートアップ））による研究成果の一部である。